



ふれんどりい代表取締役

筒井 すみ子 氏(2)

ばこを取り上げたことも拍車をかけた。母は、他の利用者のたばこを勝手に吸ったり、夕方3時ごろには雨戸を閉めたり、4時になるとお米を研ぐと言い出したり。毎日のようにこれらの行為を繰り返していた。

や壁に便をつけた時に「何しているのよ！」と怒鳴ったことがあった。他の利用者が同じ行為をしていたら「片付けよう」とただけだよね」と穏やかに声がかけられるのに、母に対してはイライラが抑えられず、余裕がなくなってしまう私がいた。

かかりつけの病院に付き添つていたが、ある時、どうしても母と手をつなぐことができなく

て行う介護はまったく違う。特に感情面で、自分をコントロールできなくなることがあるのだ」と、母の介護を通じて実感した。その経験があつたから、利用者の家族に「大変などきは私たちが全部やります。ご家族はできるときにやってください」と心の底から言えるようになった。

次第に母は食べ物を飲み込めなくなっていて、病院に行くと脳梗塞と診断された。病院には歩いて行つたが、そのまま入院し、3日後に再び脳梗塞を起こし寝たきり状態になつた。医師に冒ううが必要だと言われ迷つたが、しなければ『死ぬ』と思うと選択するしかなかつた。母は大病院から老人

民家を活用した
「デイサービスふ
れんどりい」を
立ち上げ、母を

利用者として受け入れることにした。

なった。事業の立ち上げから一緒に仕事をしていた友人が、そんな私の態度に気付いて、「今あなたと一緒にお母さんはかわいそう」と言つて、私の位の姿を母を見ていた。面会も週間に

母を自分の代理人に
家族介護の辛さ実感

後3カ月間は、毎日仕事帰りに病院へ面会に行き、拘束ベルトを外し座

代わりに通院に付き添うようになつた。その時の母は、支払いをしなくてはと自分の財布からお金を払つていたといふ。私のイライラが母を追い詰めていたのかもしれない。

第三に訪問回数が減っていくた
ある時ハッとした。「私は何
をやっているのだろう。これで
は母をひきとった意味がない」
と思った。折しも介護保険制度
改正で小規模多機能型居宅介護

「民家改修型の小規模多機能型一戸
れんどりいの郷」も温かい雰囲気

私は介護の仕事を始めたときに、「自分は高齢者に優しくなれる人間」「この仕事は自分に合っている」と思っていた。母を引き取るときも、受け入れることができると信じていた。しかし、現実は違っていた。家族介護と仕事とし

が創設された。広い空間民衆を購入し、重度者を受け入れられるよう機械浴を導入、エレベーターもつけた小規模多機能型を立ち上げた。あんなに嫌だった母を、瘦たきりになって受け入れる気持ちになれたのには自分自身驚いた。

續八